
バツマル秘密日記

ちっぽけたまご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バツマル秘密日記

【Nコード】

N86910

【作者名】

ちっぽけたまご

【あらすじ】

このお話

幼なじみ翔の事が嫌いな結衣は恋の行方を描いた作品。

ライバル宣言（前書き）

初オリジナルです。

読んでくれたら光栄です。

ライバル宣言

ざわざわとする教室。あたしは、友達と一緒にイスに座って楽しく喋っていた。
いつもと同じ。

ガラッー……

勢い良く戸を開けていつもの遅刻。

そう、問題児でもあり、あたしの幼なじみでもある翔。

「結衣~~~~~？はよー。みんなーはよー！」

「おー。風早じゃん。おせーよ。堂々と遅刻してんじゃねーよ。」

ぎやははと言う笑い声と小さな黄色い声が廊下から教室に響いて耳が痛い。

クラスのひとりが言った。

「あのさ、風早ー。ちょっと来てくれんか？話があってさ秘密だし・・。」

「あ、山野か。いーよ。ついてく。チョイ待ち・・、俺カバンかけてねーよ。」

「OK。」

翔はカバンの中の荷物をせっせと机の中に入れ、カバンを横に掛けた。

「今行く。みんなちょっと待ってー」

翔が教室を出た瞬間、黄色い声と振り返る女の子が沢山居た。

クラスでも頭のいい方でイケメンな山野くんがあたしの方を見て行った。

「結衣も・・来てくれたら嬉しいんだけど。まーどっちでもいい。」
「うん。じゃあ、あたし行くわ。美咲、待ってて。」

「うん、ココで待ってる。」

あたしは席から離れ、山野くんと生涯流浪かに走って向かい、一緒に有るところへ向かった。河原だ。

「河原？」

翔が言う。山野くんは冷静な顔をしてあたしの腕をグイッとつかみ引く張った。

「山野くん・・・？」

山野くんはあたしのとおりで立っていた。翔の方を向いて。

ざわあつと芝生の様なのが揺れてあたしの髪も揺れた。

「なんのつもり？」

翔が口出した。

「結衣に何かしたい訳。結衣に何かしたら俺が許さん。」

ふつと笑って山野くんが言う。

「ああ。俺は結衣が好きだ。」

(・・・・・・・・・・は・・・・・・・・??????)

あたしの肩にポンと置く山野くんの手。暖かい。

山野くんはイケメンだし、あたしこう言う人好きだし。

「それが？ライバル宣言？意味湧かんねー。結衣は、俺の事好きな訳じゃないし・・・ごめんな結衣。山野がお前の事好きだって。俺なんか幸せできないもんな。」

翔は、あたしの手をずっと握ってくれた。ひとりの時でも、家となりだって言う事でもないけど、ずっと助けてくれた。山野くんはいい人だけど・・・あたしはどう判断して良いか分からなかった。

「ゴメンネ。山野くん。」

あたしは河原から逃げた。あたしの後を翔が追いかけて来たので止まった。

頭をかく翔が行った

「ゴメン。俺・・・甘いよな。守ってやれない本当にそうなんだ。」

「ーいつも・・・手を握ってくれた事は本当なの。あたしは確かに翔の事嫌いだもん。でも守れないなんて言っちゃダメ。あたしを支えてくれたり助けてくれたのは翔・・・あなたでしよう？」

走り去った。告白みたいで恥ずかしかった。

これは、ゲームの始まりでした。

ライバル宣言（後書き）

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8691o/>

バツマル秘密日記

2010年11月12日21時01分発行